様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２００１８

研究課題名（和文）死の現象学的考察―死すべき者と言葉との関わりを手がかりに―

研究課題名（英文）Phenomenological Research of Death - from the relationship between mortals and the words-

研究代表者
寿　卓三（Kotobuki, Takuzo）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：３０１８６７１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　グローバル化の進展は、現代社会が「総駆り立て体制Ge-stell]によって駆動される「犠牲のシステム」という側面を持つことを顕在化させ、人-間的共生の可能性を縮減させつつある。
　アングロ-サクソン系哲学における死の考察と実存主義の死の哲学とを架橋しつつ、トーマス･マンの言う「絶望の超越性」、つまり「希望のなさの彼方に生まれる希望」を見いだす「芸術的逆説」という思想と関連づけてデリダにおける〈喪〉の問題、さらにはパウル・ツェランにおけるハイデガーによる謝罪への期待を読み解くことで、人-間的共生の地平を切り拓くことは依然として可能であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Progress of globalization has made it apparent that modern society has the aspect of ‘sacrificial system' , that is driven by ‘Ge-stell'(the total driven system). While cross-linking discussion of death in Anglo-Saxon philosophy and the death philosophy of existentialism, we discuss about Thomas Mann's concept of ‘despair of transcendence', a problem of ‘mourning' in J.Derrida and the expectations of the Heidegger’s apology in Paul Celan. Despite the deepening of the globalization and sacrificial system, by the help of the power of artistic paradox, we can hope that it is still possible to open up the horizon of symbiosis.

研究分野：倫理学、哲学

キーワード：芸術　共生　死　絶望の超越性　喪

## １．研究開始当初の背景

政治･経済･文化総体のグローバル化と共に進展する市場原理の一元的支配は、人々の内面を陶冶するという迂路を経ずに、音量や椅子の堅さなど外的環境の調整によって人々の動向を操作する傾向を強める。そして、人間の能動性は外的環境への自発的順応へと縮減化され、人間の行動の制御によって社会のあり方を整序する「総駆り立て体制 Ge-stell」という特質が顕在化する。

リルケ『ドゥイノの悲歌』第八歌によれば、理性なき動物は、「開かれた世界 das Offene」を「すべての眼で」見るのに対し、理性的動物である人間は、みずからに対-置されたこの世界を「動物のおももち」を介してうかがい知るに過ぎない。「*とらわれにおける振る舞い das Benehmen in der Benommenheit*」に終始する動物と、「*全体における存在者の内部での現存在の呪縛*」（『形而上学の根本諸概念』）とを峻別するハイデガーは、リルケの詩の内に動物の「恐るべき人間化」および「人間の動物化」という問題性を見る（『パルメニデス』）。しかし、ハイデガーは G. アガンベンが強調するように、「退屈」という根本気分を考察する中で、「とらわれ」と「呪縛」という動物の本質構造と人間の本質構造が「極度の近似性 die nachste Nahe」を持つことも認める。アガンベンは、象徴的意味空間を生きる bios としての身体が、剥き出しの生物的身体である zoe へと回収されることを問題とするわけだが、「世人」の「退屈」という気分の分析を通して、ハイデガーも人間が動物へと極度に接近する危険性を看取していたと言える。

グローバル化と相まって進行する市場原理は、bios としての象徴的意味空間を縮減させ、人間の環境への呪縛を高め「総駆り立て体制」を深化させる。その結果、ロストジェネレーションという言葉が端的に示すように、「包摂」によって社会の平等化を推進するよりも社会の効率化を優先させ、世代間や社会階層間の断絶を生み出している。このように環境世界の呪縛が強まる状況下において、社会総体の閉鎖傾向を打破し、「他者無しでは救われない」という人-間的共生の地平を切り開くことはなおも可能であろうか。本研究は、このような問題関心から出発した。

## ２．研究の目的

本研究では、まず、動物のように「抑止解除の輪 Enthemmungsring」にとらわれがちな日常性を「宙づり Hingehaltenheit」にし、日常的連続性・充実を「空白へとさらす Leergelassensein」退屈の中で明らかになる「無の内に投げ込まれ保たれている」という現存在の有り様の考察から出発する。ハイデガーは、1925 年夏学期のマールブルク講義『時間概念の歴史への序説』においてすでに「*死の現象学*」という*試み*を表明していた。それによれば「死一般」というモノは存在せず、「私の死としての死、この可能性が私自身」であり、このように人間の全体性に関わる現象としての「死」が当の本人にどう立ち現れてくるのかを問題にしていた。「私は私の死を経験できない、なぜならそのときすでに私は死んでいるのだから」としてエピクロスがすでに問題にしていた「私の死」と「死すべき者であるという事実 the fact of being a mortal」との間には確かに重大な裂け目があり、死は、単なる植物や動物とは異質な存在であるパーソンにとって特異な相貌をもって立ち現れてくる。

B.N.Schumacher は、ハイデガーのこの「死の現象学」を批判的に継承し、「生物学的死」と「パーソンの死」との区別如何を問題にするアングロ-サクソン系哲学における死の考察と現象学や実存主義の死の哲学とを架橋すべく、「生の*内なる死* death *in* life」という事象に着目する（“*Death and Mortality in Contemporary Philosophy*”）。彼は、死を*「剥奪 Privation」*と捉えることで、「経験主義」および「主体の必要性」を前提にして死の無意味性を説くエピクロスに抗して、死が死んだ当人にとって悪である可能性を切り開こうとする。そして、死が剥奪としての悪だとすれば、死はその深刻さを保持しつつも、死の持つ悪という契機を希釈する可能性が切り開かれてくると主張する。というのも、他者や未来へと開かれることによって N の希望が N の死後も生き残るとすれば、他者や未来を介して N の望みは生命を保ち、現世での生がたとえほんの一時的なものに過ぎず道半ばにしてこの世を去ることが死すべき者の定めだとしても、N の生は有意味なものとなり得るからである。

死は生者にとっても死者にとっても無であるとするエピクロスの主張は、生にとって死が持つ重みを減じ、不慮の死や「殺される」ことの悲劇性をも消し去ってしまいかねない。このような危険性を克服すべく倫理学的探求として死生学の再構築を目指す「死の現象学」は、禅の公案を考え抜くことで、「死が生の否定媒介としてその緊張動力となる」という*「死復活」*、*「実存協同」という田辺元の哲学観*と相呼応する。われわれの実存の各瞬間は、それまでの有り様を保持し持続させようとする保守的契機が新たな未来を創造しようとする革新的契機によって否定されると同時に、未来に対する空虚な願望がこれまでの基盤と結びついて実現可能なものとなるべく修正される瞬間でもある。過去と未来がまさに今ここで出会ってぶつかり合い、そのぶつかり合いを通して統合される。このような微分的かつ積分的運動のただ中で、生者と死者がその絶対的他性を保持しつつも実存協同態を組織し、死復活を現実化する可能性が拓かれることを明らかすることを目指す。

端的に言えば、近代化の進展が、「他者無しでは救われない」という人-間的共生の可能

性は縮減するのに抗して、「生物学的死 biological death」と「パーソンの死」との区別如何を問題にするアングロ-サクソン系哲学における死の考察と実存主義の死の哲学とを架橋することで、「生の内なる死 death in life」という事象の現象学的考察によって、人-間的共生の地平を切り拓くことを目指した。

３．研究の方法

まず、「生の内なる死 death *in* life」という事象をパーソン論および現象学等の文献に基づいて考察し、死や共苦の経験と他者への開けとの構造連関とその通路についての理論的考察を深めた。その際、研究代表者、研究分担者はそれぞれ個別的に研究を進めると同時に、メール等で研究の進捗状況を報告しあうと同時に、研究会を年に数回開催して討議する機会を持った。

つぎに、この理論研究と平行して、小学校・中学校・高校などの学校現場の日常的場面において共苦体験の在りようを具体的に把握し、その体験に向き合うことで児童生徒の対他関係においていかなる変容が生じるかについて考察した。

また、フライブルク大学やブルゴーニュ大学等を訪問した。

４．研究成果

田辺元によれば、ハイデガー的な同一性論理に固執する観念論においては、死への先駆的覚悟性が語られ、秘蔵としての死、つまり論理によって測りえない次元が語られたとしても「自己中心の美的観念論的遊戯三昧」の域を出ることはできない。これに対し「弁証法の観念実在論的死復活の自覚」によって、自己完結的なエゴという「旧人」としての有り様を乗り越え「新人に復活」するならば、この実存者が、幽明界を異にしつつも、死者の沈黙の声に耳を傾け、その声に応えることによって、死者はその死後も生者を介して復活することが可能となる。逆に言えば、愛に媒介されて死者の声に深く耳を傾けるとき、生者は旧人としては一旦死ぬが、新人として復活しうるのである。ここに生者と死者との交互媒介によって両者は絶対的他性を有しつつも同一となる関係を切り結ぶ可能性が拓かれてくると語っていた。ハイデガーやバトラーの〈アンティゴネー〉読解は、まさにこの「死復活」の可能性を切り拓く試みであったと言えよう。

バトラーは、現在の表象体制を危機に晒し、新たな関係のあり方を切り拓くべくわれわれを導く存在としてアンティゴネーを捉えている。死という喪失の意味を再措定することが課題となっているのである。これは、まさにハイデガーが、存在者へのとらわれから存在へと眼差しを向き変える転換点をなす存在としてアンティゴネーを捉えていたこととあい呼応する読解だと言えよう。両者は共に、存在了解の狭隘化を打破し新たな存在了解の可能性を切り拓こうと試みているわけである。

パウル・ツェランの作品「トートナウベルク」である。難解な作品であるが、ハイデガーが第二次世界大戦中のユダヤ人、そしてナチズムの問題について沈黙し続けることに対して、デリダの言う「喪」の否定を感じ強い失望感を示している。「喪」とは、一般化不可能な特殊個別に徹底してこだわることであり、その絶対的なユニークさによって万人がその独自のユニークさを切り開き、個別かつ普遍へと関与する可能性を切り開く事象である。ツェランは、ハイデガーの沈黙に対しなぜ失望したのだろうか、別言すれば、ハイデガーが謝罪することでいかなる地平が切り開かれるとツェランは希望していたのだろうか。

ツェランにとっては、ハイデガーの沈黙は自分の一貫性ということに固執し、自己の破れを認めようとしない態度にほかならない。その限りでツェランの絶望は当然であろう。デリダも述べるように、責任ある主体を担保するはずの自己同一性に固執することは、「責任一般」に固執することであり、具体的個別的事例に即してみれば、実は無責任であり、きわめて非倫理的で暴力性を帯びることになる。

デリダは、『旧約聖書』におけるアブラハムの葛藤の考察を通して、「他者の代わりに死ぬ」とは、他者の生をその全体性において代替することではなく、つねに「ある特定の事柄において」その他者のために自己を犠牲にすることに他ならないというハイデガーの死の代替不可能性に関する考察の意味を再認識する。そして、このハイデガーの考察は、パトチュカやレヴィナスが単独性の経験としての責任を「他者の代わりに死ぬ」ということではなく「他者のために死ぬ」に根づかせていることと交差していると指摘する。ハイデガーとレヴィナスを連続的に捉える眼差しが可能になるのは、デリダが、責任という概念の内包するアポリア、つまり「無責任化としての倫理 ethics as irresponsibilization」という特異な考えに立脚するからである。責任は、一方では、一般的なことについて一般者の前で説明するということを意味し、その限りで「代替、身代わり、置き換え substitution」という契機を持つ。しかし、他方では、責任は、絶対的な単独性、代替不可能性、反復不可能性という契機を持つ。つまり、「一般的な責任 responsibility in general」と「絶対的な責任 absolute responsibility」との解決不可能な矛盾が責任という事態には内包されているのである。「絶対的に責任のあるものに成るためには、無責任でなければならない」という事態、つまり個別の具体的場面に真に向き合うには、一般論の地平を逸脱する次元を内包するということが生起するという事態に定位してデリダは立論しているの

である。一般的地平の否定と新たな地平の構築との弁証法的関係をデリダは明確に意識している。

アガンベンもヘーゲルやハイデガーを批判的に考察する中で、否定性と開けとの相即的関係を明らかにする。アガンベンによれば、ハイデガーの存在の思考もやはり「声」による思考なのである。「このものの把握 das-dieses-Nehmen」と「現-存在という経験 die Erfahrung des Da-seins」の考察を通して、「沈黙した、語り得ない音声 eine verschwiegene,unaussprechliche Stimme である声 die STIMME」が、最高のシフターとして、思考から言葉を生成させ、さらには、存在者との差異において存在の次元を根拠づけることが明らかにされる。「死と声とは同じ否定的構造を持っていて、形而上学的には不可分離の関係にある」。この「声」を経験するとは、「たんなる生の中止 bloßes Ableben」ということではなく、人間的実存のもっとも固有にして乗り越え不可能な可能性としての死を受け入れることを意味する。根源的なロゴス[論理]的要素としての声は、根源的な倫理的要素でもある。動物の音声とは異なる音声、単なる生の中止とは異なる死、この両者は一体となって「死の声 die STIMME des Todes」を構成するが、これによって、言葉は「わたしたち」の言語となり、世界は「わたしたち」の世界となる。言葉を話す〈自由な＝開かれた frei〉 存在である人間の〈否定的〉根拠が明らかにされたわけである。

パウル・ツェランがハイデガーの謝罪の声を期待したのは、そしてデリダが〈喪〉として問題とするのは、〈アンティゴネー〉、そして田辺の死復活に連なる問題であったと言えよう。

確かに、グローバル化の進展は、現代社会が「総駆り立て体制 Ge-stell」によって駆動される「犠牲のシステム」という側面を持つことを顕在化させ、人-間的共生の可能性を縮減させつつある。しかし、以上の研究を通して、アングロ-サクソン系哲学における死の考察と実存主義の死の哲学とを架橋しつつ、トーマス・マンの言う「絶望の超越性」、つまり「希望のなさの彼方に生まれる希望」を見いだす「芸術的逆説」という思想と関連づけてデリダにおける〈喪〉の問題、さらにはパウル・ツェランにおけるハイデガーによる謝罪への期待を読み解くことで、人-間的共生の地平を切り拓くことは依然として可能であることを明らかにした。

教育現場から寄せられた 3 つの論考、愛媛県の小学校教諭桐山真美「小学校における「生」と「死」にかかわる授業について」、愛媛県教育委員会義務教育課勤務の山内孔「命の教育についての考察」、そして愛媛大学附属高等学校教諭辻公正「高校倫理における「まとめ」の授業の取り組み」によって、以上の理論的考察が、学校現場と理論的研究との往還によってさらに深化しうる可能性を示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８　件）

１　寿　卓三「絶望の超越性−否定性の積極性−」（平成 24 年度～平成 26 年度科研費補助金基盤研究（C）研究成果報告書所収、2015 年 3 月）、査読なし、7-31 頁。

２　上利博規「１８世紀における起源への問いと死」（平成 24 年度～平成 26 年度科研費補助金基盤研究（C）研究成果報告書所収、2015 年 3 月）、査読なし、32-41 頁。

３　森　秀樹「死が〈ある〉とはいかなることか？」（平成 24 年度～平成 26 年度科研費補助金基盤研究（C）研究成果報告書所収、2015 年 3 月）、査読なし、42-79 頁。

４　上利博規「ヒンドゥー舞踊クーリヤッタムにおける神の顕現」、『アジア研究』第 9 号所収、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター、査読無し、2014 年 3 月、3-13 頁。

５　上利博規「城下町の治水施策」,]『アジアの近代化と水』静岡大学超領域共同研究、査読なし、2014 年 3 月、4-23 頁。

６　上利博規「水から考える環境の文化的価値―対症療法ではない環境倫理のために」、『文化と哲学』静岡大学哲学会所収、査読有、vol.30、2013 年 9 月、57-86 頁。

７　森　秀樹「『労働の現象学』試論」、『実存思想論集』（実存思想協会）第 28 号所収、平成 25 年 6 月、依頼論文、85-104 頁。

８　上利博規「高齢者の社会参加促進に必要とされる科学技術に関する調査研究」、高齢者の社会参加促進に必要とされる科学技術に関する調査研究報告書、査読無、一般財団法人　新技術振興渡辺記念会助成 H23−276，2012 年、１～35 頁。

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　６　件）

１　森　秀樹
『ハイデガー読本』共著、法政大学出版局、2014 年、分担執筆 27-36 頁（全 393 頁）。

２　森　秀樹
『信頼感の国際比較研究』（共著）、中央大学出版部、2014 年 3 月、分担執筆 51-70 頁（全 262 頁）。

３　寿　卓三
『ドイツ哲学の系譜』佐藤康邦・湯浅弘編著、NHK 出版、2014 年 3 月、分担執筆 174-217 頁,231-234 頁（全 242 頁）。
４　上利博規
『看護の倫理』、みどり印刷、2013 年、1～102 頁。
５　寿　卓三
Les mythes de foundation et l'Europe, 共著、Editions Universitares de Dijion,2013 年、分担執筆 205-214（全 323 頁）。
６　森　秀樹
『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』、世界思想社、2012 年、分担執筆 61-83 頁〈全 312 頁〉。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者　寿　卓三(Kotobuki Takuzo)
（愛媛大学教授、教育学部）

研究者番号：３０１８６７１２

(2)研究分担者　森　秀樹(Mori Hideki)
（兵庫教育大学教授、社会系コース）

研究者番号：　００２７４０２７

研究分担者　上利博規(Agari Hiroki)
（静岡大学教授、人文社会科学部）

研究者番号：　２０２２２５２３

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：